

## TAKI no TAWAGOTO

【30年前のレンズにはまる】

前回、最新の1眼レフデジカメに昔のレンズを装着して楽しむという話をしましたが、ひとつレンズを買うと、また次のレンズが欲しくなるという悪循環に陥ってしまい2ヶ月間でもう4本も買ってしまいました。

私が主に買うのはインターネットの'ebay'(イーベイ)と呼ばれている世界最大のオークションサイトです。日本では'Yahooオークション'が有名ですが、世界ではこの'ebay'が共通のオークションサイトとして有名です。

M42マウントという昔の規格のレンズですが、第二次世界大戦後の主に1960年代～1980年代に生産された東ドイツ製のレンズに品質がよいものが多いので、ポーランドとかウクライナとか旧共産圏の業者から買う場合もあります。面白いことに、戦前世界最大の光学機器メーカーであったカールツァイス社は元々本拠地が旧東ドイツのイエナという学園都市にあった為、戦後の東西冷戦で多くの技術者が西ドイツのオーバーコッヘンへ移り同じ社名の会社を設立しました。ツァイスという世界最高のブランドが東西ドイツに分裂してしまったのです。

自分は西ドイツのツァイスやそこからライセンス提供された日本製のツァイスレンズは何本か持っていたのですが、この本家本元の旧東ドイツ製のレンズは持っていなかったため、一度試してみたらハマってしまったんです。

価格的にみると、同じツァイスイエナ製をYahooオークション等で買うよりは、平均して3割程度安く入手できます。また西ドイツのツァイス製はブランド力が強いのでとても高価ですが、ツァイスイエナ製だと、ほぼ同等の性能のレンズをかなり安価に入手できるのも魅力の一つです。さらに1970年代まではツァイスイエナの方が広角レンズ分野ではオーバーコッヘンに勝っていたので、この時代の世界最高の広角レンズを試してみるとということにも楽しみが湧きます。

いずれにしても、親や祖父の代では入手不可能だった本家本元のツァイスレンズを世界中からよりどりどりで楽しめる。このことがとっても有り難く感じます。



Carl Zeiss Jena  
Flektogon 2.4/35

先月発生した岩手・宮城内陸地震の被災者の皆様に心より、お見舞い申し上げます。

さて、この震災は専門家の緊急調査で、**これまでに無いほど被災地区が狭い範囲に限定されている**ことが明らかになりました。**東北の殆どの地域・観光地は全く無事**です。

にも拘らず連日の報道により、広域災害と誤解され、旅行のキャンセル・予約が入らない状況が既に東北全域に及んでいるようです。**被災周辺地域への風評被害は、経済復興の最大の障害**であり、被災地をフォローする周辺地域に対して余りにも冷酷です。どうか冷静な情報収集と判断をお願いいたします。(濱)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2008/07

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2008/07

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

## 文 月



山形県白鷹町にて  
by hama

**がんばれ！東北  
負けるな岩手・宮城！**

岩手・宮城内陸地震  
風評被害対策勝手連プロジェクトに賛  
同します！！

# 寄稿 『遠州横須賀 三熊野神社大祭を』

縮く其式』 田中 興平

享保十年（一七一五）頃の附祭の形態は祇里九町、踊り三町、と毎年交代で行い、お城、重役屋敷、各町を曳き廻していた。尤も祇里と言っても現在の祇里（一本柱万度型）ではなく、昇（さか）出しが先頭を行き、後を演目に添った仮装行列、底抜け屋台が従つた形態であった。一方踊り町は昇（さか）出し、底抜け屋台、踊台が練り従い、当時江戸大阪等で上演された狂言、浄瑠璃が初演からほど遠く無い時期に三熊野神社大祭でも行われていた。新作の狂言、浄瑠璃を早く取り入れるため、町民はたえず三味線、謡、踊り等の稽古をしていたらしく各町には練習する稽古場があった。その名残で遠州横須賀では公会堂の事を今でも稽古場と呼んでいる。その後、幾多の変遷の中で明治を迎えると、理由は定かではないが踊り、底抜け屋台、踊台は消滅してしまい祇里を中心とした華麗な祭に成っていった。三熊野神社大祭の特徴は見せる祭ではなく「やる祭」であって、江戸火消し装束のまつり人が、三社祭礼囃子に合わせて「したした」のかけ声を掛、ステップを踏んで祇里を左右に練りながら曳き廻す。

祇里と曳き手と囃子が三位一体となり、他の山車祭では表現できない、華麗にして優雅な、粋と、いなせと、キップの良さを醸し出す。江戸系の祭の特徴はこの粋と、いなせと、キップ良さを表現出来る事である。この祇里を曳く時のステップであるが、最近の調査により「反問ではないかと考えられるようになった。反問とは（おんみよひ）陰陽道における呪術的な歩き方の事で、その昔天皇

## 濱のいざなわ 『災い転ず』

六月十四日に発生した岩手・宮城内陸地震は当初流されたダム山崩壊の凄まじさから、相当大きな被害と思われた。金沢在住のプランナーが観光アドバイス先の宿で殉職されたことも、こちらでは大きな衝撃だった。一年前の能登震災がよぎる。

地震発生から十日後の火曜、東北に出張予定があった。彼の地の知人に問い合わせても被害が殆ど無いというので、予定通り出発。最初の目的地・山形県白鷹町（表紙写真）周辺は全く地震の陰も無い。むしろ途中の北陸自動車道は、未だ柏崎周辺で波打った路面の補修工事中で、中越沖地震の爪跡を感じる。

今回の主務務で知り合った大沼さんを木曜に急遽訪ねた。氏は東鳴子温泉で温泉宿を営んでいる。震源から直線で三十㎞程しか離れていない。過去の例では少なからぬ影響がある筈だが…。果たして、初めて訪ねた鳴子温泉郷は、全く無傷で迎えてくれた。

予定を変更してまで、迎えてくれた氏から玄米粥の昼食をもてなしていただいた上に、辺りを案内していただいた。地元の農家の高橋さんからの提案で、農業体験と湯治を組み合わせた「田んぼ湯治」



NHKにも出演したという大沼さん(左)と高橋さん(右)

の出御や貴人の外出の時、陰陽師によって行われた、邪気や悪鬼を払い安泰を祈る所作のことである。この発展したものとて角力の四股や歌舞伎等の六方も反問このステップが反問だとすると、三熊野神社大祭は民俗学的には非常に重要な素養を秘めていると言つことが出来る。すなわち祇里の出しの部分に神様の降臨をお願いし、曳き手は神様が通る頭が高い「したした」のかけ声を掛、なおかつステップを踏んで「反問」道路の邪気悪鬼を払い、三熊野神社に神様をお連れする。その昔、神様は常時鎮守の森にいないと考えられていた。ハシの日に移動神座に神を降臨させ社にお迎えして、氏子と酒食を共にして祭を執り行うというものであった。その移動神座が山鉾、山車であった。ところが時代が進むと、常時鎮守の森に神様はお住まいになっていると考えられるようになり、神様は神輿に乗って氏子各町を廻って神意を示すような祭形態に変わってしまった。すなわち遠州横須賀で祇里を曳くという事は、古い祭形態の移動神座に神様を降臨させ、社にお連れすると言つ古い祭形態がここでは、生きているのである。



三熊野神社大祭 河原町の祇里



【プロフィール】  
たなか こうへい（  
一九四八年遠州横須賀に生まれる）  
遠州横須賀倶楽部「意見番」  
静岡県掛川氏横須賀在住

のことや「どぶろく特区」、都市と鳴子を結んで地域で農業を支える「鳴子の米プロジェクト」など、地に根を下ろした取り組みを現場で教えていただいた。最後には人気の露天風呂まで体験させていただき、なんとお風呂におもてなしに只々恐縮するばかりだった。

その夜、知人を訪ねた山形かみのやま温泉でも、キャンセルが出ているという。同時期被災地入りしていた防災専門家によると、今回は被災地が稀に見るほど小さく限られているらしい。主要な国道は全くと言って良いほど無傷とのこと。がマスコミも広域災害だと錯覚して報道しているようだ。何事も現場での冷静な取材を経ずしてデスクにかじりついては事を見失う。

この地震で被災された方々には心からお見舞いを申し上げたい。しかし、秘湯で亡くなったプランナーは元旅行代理店勤務。今回の災害で誤解による旅行のキャンセルや、加えての風評被害は望むはずが無いと思う。

冷静な判断のためにも地元からの的確な情報発信が欠かせない。マスコミや代理店を通じてのつながりではなく、生産者・消費者が直接つながってより理解しあえる関係性を築くこそが、災害後の復興に強い地域を作るのではないだろうか。東鳴子では、その確かな胎動を感じた。都市民との弛まぬ交歓が一層充実することを願ってやまない。

負けるな岩手・宮城！ がんばれ東北！





## 『モチベーションについて考える（その2）』

(株)アスリック プロジェクト推進部 五十嵐 政信

前回モチベーションというものは、人それぞれその総量は同じだけど、あることが原因となり、モチベーションが出やすくなる場合と出にくくなる場合がある、という話をしました。モチベーションが出にくくなっている人には、何か障害となっている。これをコップ水と蓋に例えると下図のようになります。

この蓋は、コミュニケーションによって被さったり外されたりします。

人は、仕事を通じていろんなやりがいを感じますが、そのやりがいの大本即ち源泉は様々です。このやりがいの



源泉をモチベーションリソースとよびます。（以下モチベーションリソースを略してモチリソと言います）とは言うものの、このモチリソは、大きく分けると4つに分けられます。自分のメンバーのモチリソは何なのかを把握して、そのモチリソに応じたコミュニケーションで、コップの蓋を外すようにすれば、モチベーションの維持や向上を図ることができるようになります。

1つ目のモチリソは、自分の会社組織に帰属することや、その目的、価値、組織内での役割－責任、地位といったものにやりがいを感じます。これを組織型と呼びます。

2つ目のモチリソは、職場の仲間との協働の喜び、職場・仲間からの評価、社内競争などにやりがいを感じます。これを職場型と呼びます。

3つ目のモチリソは、家族の期待と応援、生活が豊かになる実感などにやりがいを感じます。これを生活型と呼びます。

4つ目のモチリソは、仕事そのものの目的、仕事のプロセスの中での発見や工夫、裁量の余地、仕事から得られる経済的な報酬や個人に蓄積できる知識、技術、人脈などと言った非経済的な報酬などにやりがいを感じます。これを仕事型と呼びます。

人には、この4つのモチリソを、濃淡の違いはありますが全て持っています。しかし、4つを均等に持っているわけではなく、4つのうちのどれかが強く影響するようになっています。

また、モチリソなどというものを自覚化している人はいません。だから無自覚に、自分のモチリソを前提に、メンバーも同じと思って接している場合が多くあります。これが、実はモチベーションダウンを引き起こす原因となっているのです。（以下次項に続く）

## 『温泉への誘い (64) - 栗駒の温泉 - 』

著者ご本人のご希望により、インターネット版ではご覧いただけません。

## 『人間臭い街おこし』

各務原キムチ都市おこし隊 隊員 山田 純

かかみがはら まち

各務原キムチ街おこし隊になって1年と数ヶ月がたち、人によって町おこしに対する考えがこれほどまでに違うことを知るいい勉強になっています。今から思えば、町おこしやボランティア、社会への貢献といった考えを漠然と懐きはじめてのは子供が産まれたのがきっかけでした。

どんな環境で子育てをするべきなのか？イジメやニート問題など、人が成長する過程で身に付けるはずの能力が欠如する問題がなぜ起きているのか？そんな疑問に自分なりの答えを出した結果が今の行動に結びついていると思います。『町おこし=人の繋がり』そんな考で町おこしを捉え参加してきました。

できる人というのは自分が最前線の現場に立ちたがりです、最前線の現場に立ってグイグイ引っ張れば上手くいきます。しかしそれは意味のある成功でしょうか？自分がそのポジションを退いた時、自分の穴を埋めることができ、さらに向上していくことができる人材は見つかるのでしょうか？こういった場合『その場つなぎ』という言葉が当てはまるのではないのでしょうか。

『その場つなぎ』を町おこしに置き換えると、どうなるでしょうか。単発の活性剤を投入する様に、一時的に盛り上がり成果もある程度ついてくると思います。しかし、長くて数年、短いと半年もしないうちに廃れてしまうのではなんでしょうか。次は何を使って町おこしをしよう？アレもやってみよう！コレもやってみよう！・・・それでもいいじゃないか！という意見も否定はしません。しかし

『その場つなぎ』は戦術になっても戦略にはなりません。また、戦略の先の目標達成のために戦術的に芽を摘む行為も必要だと思います。

町おこしを戦略的に捉え目的を達成していく、それが善くも悪くも興（おこし）を成し遂げる上で必要条件ではないかと感じています。

極端に言うと、中心となるリーダーは自分の中に善と悪を持ち合わせ、必要とあれば悪でも戦術として駆使する能力がなければ、町おこしやボランティア団体をコントロールできないということです。善の部分だけを使うのではなく悪の部分から得る考えを善に活かす事が人間臭い生き方ではないかと思えます。

## 『富士の国から ～大魔神のたび～』

静岡県観光局 溝口 久

(前号からの続き)

その後、藤林さんの案内で山荘無量塔に向かった。無量塔と書いて、むらた。「無量」とは仏教のことばで、数字で計ることのできない無限のもの、「塔」とは建物を意味する。

由布院盆地を囲む山の懐にある広い敷地、だが、高低差がかなりあり、本来旅館を建てるには難しい土地形状かもしれない。でも、隣に変なものが建ち、環境を壊されることもないし、各離れの独立性を高くすることができ、かつ必然的に立体的な緑の配置になり、いっそう山荘の雰囲気醸し出している。

かつての杉・桧の山を伐採根抜き、くぬぎ、こなら、シャラ、カエデなど里山にある木々に植え替えている。いかにも昔からそこにはえていたかのように。これは旅館「玉の湯」が水田だった土地を5m程掘って山土に入れ替え雑木を植え、いかにも昔からある林の中にたたずむように旅館を造ったことに共通している。

宿は別府にあった別荘、豪雪地帯の庄屋といった古民家を移築してきている。「Qさん、日田から由布院に来て喫茶、食事処をやらせてもらい、次に旅館をやることになったんだけど、別に旅館をやりたいかたわけではない。気持ちいい環境を手に入れるためにはそこそこ広い土地が必要だし、その土地への投資を回収するには旅館がいいと判断したからなんだ。周りは皆、旅館業は初めてなんだからペンションぐらいから始めたらどう？」と言われてたけど、亀の井別荘、玉の湯があるから由布院に来たので、やるからには両旅館と肩を並べ、かつそこに無いものをやりたかった。それが「憧れの生活スタイルの提案」なんだ。だから客室は40坪程の広さ、周囲の環境を確保し生活する空間を用意した。」

お連れした静岡県の温泉ホテルの経営者が「うちの宿が建っているところは、こちらのよう観光地ではないのですよ、だから観光のお客様は少ないのです。」と言った。

藤林さんは「その地の生活文化こそが、観光資源ではないのでしょうか。」なるほど由布院は「もっとも暮らしやすい観光地こそ、優れた観光地」をスローガンに生活型観光地を標榜している。かっこいいムラの暮らしを形にしているのが由布院の可能のスタイルなのだ。

次に「それでは、長男を由布院に出すというのはどうでしょうか？」「勤める先の旅館のスタイルに染まり、そこを超える発想、行動ができなくなるからやめたほうがいい、もし来たいというなら、私に付いて3日間ほど過ごせばそれだけでいいと思う。大事なのは真似・学ぶことよりも考える力をつけることだ」(次号につづく)

